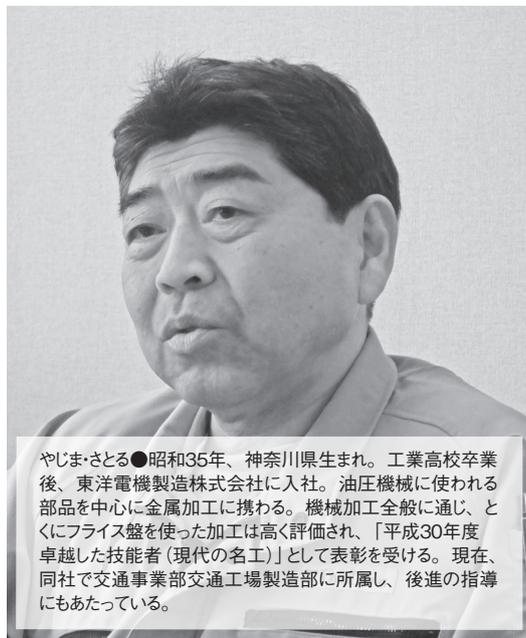


強い自負と細心の注意で 高い精度を求められる仕事 に向き合う

金属機械工
矢島 悟さん

東洋電機製造株式会社
横浜製作所

矢島さんは、鉄道車両の駆動装置などに組み込まれる部品の金属加工に長く携わり、その技能は「現代の名工」として表彰されるほど高く評価されています。その技能の高さは、次の組み立て工程までを考えて仕事に向き合う姿勢に裏打ちされています。



やじま・さとる ●昭和35年、神奈川県生まれ。工業高校卒業後、東洋電機製造株式会社に入社。油圧機械に使われる部品を中心に金属加工に携わる。機械加工全般に通じ、とくにフライス盤を使った加工は高く評価され、「平成30年度卓越した技能者（現代の名工）」として表彰を受ける。現在、同社で交通事業部交通工場製造部に所属し、後進の指導にもあたっている。

失敗を繰り返しながら腕を磨き
「現代の名工」へ

——矢島さんは新幹線をはじめ、鉄道車両の駆動装置を中心にさまざまな部品加工に携わっていらっしゃいます。もともと機械で何かをつくることに興味があったのですか。

矢島 子どものころから、プラモデルをつくるのが好きでした。それこうじて機械が好きになり、工業高校の機械科に進みました。そのころから工作機械を使いこなして、「ものづくりをしたい」という思いは強かったですね。鉄道車輛部品製造で長い歴史のあるこの会社に入ろうと思ったのも、いろいろな工作機械があって、幅広く金属加工の仕事ができると考えたからなんです。

——高校時代に学んだことと、実際の仕事とは隔たりがあるのではないのでしょうか。

矢島 たしかにそうですね。高校にも旋盤やフライス盤は設置されていましたが、学ぶのは基本中の基本でしかありません。当時新人は、社内に設けられた職業訓練校で1年あまり学ぶことになっていました。そこで旋盤やフライス盤をはじめ、さまざまな工作機械の操作を学びました。

正直、そのころは失敗の連続で、講師を務めていた先輩方から厳しい指導を受けました。

——いまでは「現代の名工」として高い評価を受けている矢島さんでも、かつては失敗を繰り返していたのですか。

矢島 失敗のたびに先輩から注意を受け、指導されました。振り返ると、失敗を繰り返しながら新しいことを学ぶ中で金属機械工としての腕を磨くことができたのではないかと思います。

訓練を終えた後、自分が希望した油圧式の機械部品をつくる部門に配属されました。そこで何とか一人前だと思えるようになったのは、3年あまりたつてからでしょうか。

次の工程を考えるからこそ
自分の仕事が確かになる

——お仕事の中で、やりがいや喜びを感じるのとは、どのようなときでしょうか。

矢島 油圧式の機械部品は、とりわけ

高い精度が要求されます。精度がいい加減な部品だと、次の工程である組み立てにおいて、所定の場所につかりと入らなかつたり、完成した機械を動かしたときにさまざまな不具合が起きてしまいます。

だから確かな精度の加工ができて、組み立て部門から「うまく収まったよ」という声をかけられたときは、とてもうれしくなります。それが金属加工という仕事の醍醐味でもありますね。

——お仕事の厳しさは、どんなときに感じますか。

矢島 フライス盤でも旋盤でも、一台一台に微妙な癖があるんです。その工作機械にどのような癖があるかをわきまえていないと、思うような仕事はできません。同じ型のフライス盤だから、あるいは旋盤だからといって癖を考えずに操作をすると、仕上がりが違ってきてしまいます。それぞれの工作機械にどのような癖があり、どうすれば思うような加工ができるのかを知っておくことも、「腕」と言えるでしょう。

——お仕事をされるときには、どんなことを心がけていらっしゃいますか。

矢島 やはり安全に作業をするということ。ちょっとしたミスでも、工作機械に装着する刃物が傷むことがあり、けがにつながってしまいますから。それに加えて、設計図通りに加工するということも心がけています。図面には基準となる寸法とともに、「寸法



東洋電機製造株式会社 横浜製作所



フライス盤加工作業中の矢島さん

「公差」といって、許される寸法の範囲がプラスとマイナスの数値で示されています。その誤差の範囲で仕上がればどこでもいいのかというと、そんなことはありません。

機械を組み立てたときに、この部品はどのように収められるのかを考え、設計図で示されたプラスの方向に加工するのか、マイナスの方向で仕上げられるのかを考えるようにしています。その部品を組み込んだ機械がいちばんいい状態で動くように仕上げる。そこで考えて作業すれば、問題なく組み立てを行うことができます。

最新鋭の機械が主流となっても 変わらぬ技能がある

——矢島さんは機械加工全般に通じ、中でもフライス盤を使った加工における優れた技能をおもちであることが「現代の名工」の表彰理由になっています。矢島さんにとって、フライス盤を操作するときの、ほかの工作機械とは違う面白さは、どんなところですか。

矢島 フライス盤は、横と前後、それに高さの3軸を移動させて、立体的な加工ができるということです。それに取り付ける工具も豊富で、さまざまな加工ができることも、フライス盤の面白さですね。

——旋盤やフライス盤をはじめ、さまざまな金属加工の機械にNC技術が取り入れられ、コンピューターで自動的

に作業を行うことが主流だそうですね。矢島 その通りです。だからといってハンドルを手で回しながら操作する汎用工作機械を扱う技能は意味がないとは思いません。旋盤であれ、フライス盤であれ、そのほかの工作機械も含めて汎用工作機械を扱ったからこそそ体得できるものがあるのです。

それぞれの工作機械がどのような条件なら、最適な加工ができるかを知ることとはとても大切です。それは汎用工作機械を扱うことで培うことができます。私もNC工作機械のプログラムを自分で組んで操作しますが、それも汎用工作機械を扱った経験があるから間違いないのだと思っています。

また弊社では、新人はまず汎用工作機械で訓練することになっています。汎用工作機械を扱って、それぞれの工作機械の特性を知っていれば、NC工作機械に何らかの不具合があったときにも適切に対処できますから。

自分の技能を 後進に継承したい

——若手の指導もされていらっしゃるようですね。どんなことを心がけて、指導をされていますか。

矢島 私は現在、社内の職業訓練の講座で講師を務めています。新人の中には、この加工にはどのような意味があり、仕上げた部品はどのような役割を果たすことになるのか、十分理解していない者もいます。そうした新人に対

しては、できるだけ丁寧にわかりやすい言葉で指導するようにしています。

一方で、ある程度の経験を積んだ者に対しては、少し厳しく指導する場合もあります。指導を受ける側の経験の度合いによって、メリハリをつけて教えているということでしょうか。

そうした機会を通して、自分がこれまで培ってきた技能をできる限り、若手や中堅に継承したいと考えています。

——指導者としてやりがいや喜びを感じるのとはどんなときでしょうか。

矢島 覚えが悪かった新人がようやくできるようになったときは、指導が実を結んだと思いい、ほんとうにうれしくなります。指導者冥利に尽きるといえるのは、そんなときですね。

——ものづくりの仕事に就きたいと考えている若い人たちへのアドバイスをお願いします。

矢島 私たちのまわりにあるほとんどのものは、何らかの加工を経て世の中に送り出された工業製品だといっても過言ではありません。それらがなかったら私たちはとても不便な生活を余儀なくされてしまいます。

そういう意味では、金属加工という仕事は現代社会のインフラづくりを担っていると言えるでしょう。そうした誇りと、ものづくりが好きだという思いをもって、金属加工の仕事に就いてほしいと思います。